「元気な姿を」遺影撮る人々

「老い支度」、抵抗感薄れる

高齢者施設でも／若い世代も関心

家族や友人に元気な姿を残したい――。そんな思いから、遺影用の写真を撮る人が増えている。自分の墓や葬儀の準備を生前にしておく「老い支度」が広がり、「縁起でもない」という意識も変わりつつあるようだ。撮る人の思いを追った。

「こんなに何枚も写真を撮ってもらうのは初めて。うれしくなっちゃった」。カメラのストロボがたかれるなか、東京在住のA子さん（80）は照れくさそうにほほ笑む。

写真探しに苦労

ここは遺影・肖像写真専門のスタジオ「素顔館」（東京都中野区）。2009年10月下旬、A子さんは自分の遺影撮影に訪れた。義母を亡くしたとき、遺影に使える写真が見つからず、仕方なく旅行中のスナップ写真を拡大した。「結局、ぼやけちゃって申し訳なかった。だから私は元気なうちに撮影しておこうと」

スタジオを知り、すぐに申し込んだ。「撮影に備えて衣装を2着選び、髪も少し染めた」という熱の入れようだ。撮影終了まで約1時間。何十枚と撮った写真から、にっこりとほほ笑んだ写真を選ぶと「晴れ晴れした」。同行した義理の娘（43）も「子どもの方から遺影を撮ろうとは言い出しにくい。この1枚で私たちも安心できる」と話す。

かつては「縁起でもない」と敬遠された生前の遺影撮影。だが意識は徐々に変わりつつあるようだ。「全国から撮影依頼が舞い込み、毎日2～3件は撮影している状態」と素顔館館長の能津喜代房さん（61）。東京都世田谷区のB子さん（84）は08年に続き、09年秋に素顔館で2枚目の遺影を撮った。「1年たつとシワも増えるし、生きている間は毎年、撮りに行くつもり」

遺影撮影に取り組む高齢者施設も多い。滋賀県湖南市の通所介護施設、デイサービスセンター「らく」は07年11月から、プロカメラマンを施設に招き、利用者の「遺影撮影会」を開いている。施設の一角には、70人近い「遺影」がずらりと飾られている。

「施設を訪れるお年寄り一人ひとりの人生や記憶を残したいと思い、思い出話を聞きながら遺影写真を撮ることを考えた」と、同センター所長の東川晃子さん（33）。本人はもちろん家族や親族の了承も得て撮影に踏み切った。

目指したのは「遺影を見ながらコーヒーを飲む空間」。紋付きを着た人、ネックレスでおしゃれをした人……。大半の人は笑顔。年輪を刻んだ表情を見ていると落ち着いた気分になる。

「遺影」を撮影したひとり、C子さん（88）は「今まで写真なんて撮ったことがなかったから緊張した」と笑顔で話す。写真で着ている洋服は娘さんたちにプレゼントされたもの。夫に先立たれ、女手ひとつで子育てをしてきたC子さん。自分の写真を眺めながら、「今までよう頑張ってきた」と思わず目を赤くした。

「職員もお年寄りの生き様を聞くことで、より彼らと向き合えた。写真が張り合いになった人もいたし、写真をきっかけに会話が始まることも増えた」と東川さん。過去を振り返ったり、思い出を共有したりする「コミュニケーションツール」になっているようだ。

人生考える契機

若い世代でも関心を持つ人がいる。写真作家の倉谷拓朴（ひろなお）さん（32）。06年から全国の芸術祭などで「遺影～彼岸に還る～」と題し、来場者の遺影撮影会を続けている。のべ600人以上を撮影したが、「40～50代が一番多く、次が20～30代」だ。

撮影では、カメラの前で目を閉じた後、自分の好きなタイミングで開けてもらい、その瞬間を撮影する。「目をつぶると自然と過去を振り返ったり、これからの人生を考えたりする。普段、『死』を意識しない若い世代には新鮮に映るのではないか」と倉谷さん。

家庭に飾られている人物写真を調査している、東北大学の鈴木岩弓教授（宗教学）によると「仏壇や神棚を持つ家が減り、遺影は生きている家族やペットの写真と一緒にテレビの上などに飾られる身近な存在になった」という。

また07年の調査では、遺影に向かってお経をあげるなどするよりも、遺影に「（近況などを）報告する」（33％）という答えが目立った。「遺影をその人そのものように受け止めている証拠。死後も家族と対話できる姿を残したいという気持ちが、遺影を撮る動機のひとつではないか」と鈴木教授は推測する。

デイサービスセンター「らく」には利用者の「遺影」がずらりと並ぶ（滋賀県湖南市）

「リラックスした自然な表情を撮りたい」と話す能津さん（東京都中野区）

写真館 キャンペーンに力

遺影を撮る人が増えていることから、各地の写真館がキャンペーンに力を入れ始めている。

「生前遺影写真も承っております」。伊勢丹写真室（東京都新宿区）は2009年11月から、こんなうたい文句を載せた「シニアポートレート 還暦からの記念写真」というパンフレットを作製、店頭で配布している。

「以前は息子や娘が両親を連れてきて、『実は遺影に使いたい』などと隠れて頼むケースが多かった。だが、5年ほど前から『遺影を撮りたい』と自ら店を訪れる年配客が増えたので、そろそろ広く提案していこうと考えた」と、同写真室を運営する光潮社の堀恵介社長は言う。

広島市の写真館などが加盟する広島写真師会は「私はこれに決めました！」と銘打ち、ポスターやホームページを使って遺影写真の撮影キャンペーンを行っている。日本写真館協会では、10年に全国の写真館から集めた遺影写真の展覧会を開くことを検討している。

高齢化が進むなか、写真館での遺影撮影も広がっていきそうだ。